

豊頃でバイオガス発電

Jリード 25年施設完成

【豊頃】町長節の農事ちやうがし組合法人でメガファームの「Jリード」は、敷地内にバイオガスプラントを建造する。6日に工事の安全祈願祭を行い、2025年7月の完成を目指す。同法人で飼育する牛1400頭分のふん尿を1日に約100ト処理できる規模で、発電した電力は売電し、発生する消化液は肥料や敷料として利用する。井下英透代表ひでゆき(64)は「肥料や敷料を自給でき、循環型農業に大きく近づくと話している。

建造するプラントは、消化液の貯留槽2基(1基の直径は44尺、高さ4尺)や、ガスを取り出す発酵槽1基などを備え、発電量が200瓩時の発電設備を2基設ける。固定価格買い取り制度(FIT)を使って送配電事業会社の北海道電力ネットワーク(札幌)に売電し、年間収入は1億円を見込む。事業費は非公表。施工は岩田地崎建設(札幌)が担う。

Jリードによると、再生可能エネルギーを用いた経営は当初からの目標で、売電できる見通しが立ったため建造を決断した。送電線に空き容量がある時間帯に再生エネの発電設備をつなぐ「ノンファーム型接続」を利用して送電する。

Jリードでは、バイオガ

スプラントで発生する消化液を固液分離し、固形分の「もどし堆肥」は乾燥させて牛舎の敷料に使う。同法人はこれまで、敷料としておがくずやチップを購入してきたが、もどし堆肥を用いれば敷料も自給できる。液体分は同法人が持つ牧草地300畝と飼料用トウモロコシの畑150畝の計450畝に液肥としてまく。

井下代表は「牛のげっぷから出るメタンガスが地球温暖化の原因の一つと言われている。酪農経営者としては見過ごせず、何とか農場経営を脱炭素に結びつけたかった」と話している。

(椎名宏智)